

米国 Wills Eye Hospital での 眼科研修について

森本 帆奈 (横須賀米海軍病院インターン)

私は、野口医学研究所の援助を受け、米国 Wills Eye Hospital にて2005年7月25日より1カ月間のエクスターンを経験したのでここに報告致します。

●病院の概要

Wills Eye Hospital はフィラデルフィアにある全米で最古の眼科病院で、Wills Eye Manual を出版していることで世界中に広く知られ、U.S. News Best Hospitals 2005 の眼科部門では3位にランクされる眼科の名門病院です。72年より Thomas Jefferson University (TJU) と提携を結び、TJU の眼科部門として機能しています。眼科のみの病院としては異例の規模で、15階建てのビルをすべて外来にあてており、その一般眼科の外来である Cataracts and Primary Eye Care Service (CPEC) では年間22,000人、眼科のみのERには年間13,000人の患者が来院します。

●研修の実際

初日に Medical Education の Dr. Jaeger にお会いし、研修の予定を相談しました。私は眼科経験が短かったので、前半は眼科 ER と一般眼科で研修し、後半は網膜と角膜外来を中心とした subspecialty で研修することになりました。研修は見学中心でしたが、slit lamp で診察することは許されたので、いろいろな症例を実際に診ることができ、大変勉強になりました。また、毎朝医学生向けの包括的なレクチャーがあり、それにも参加してもらいました。また、目標があったほうが勉強しやすいだろうということで初日に Basic Ophthalmology の本をいただき、最後の週にテストをしていただきました。

●眼科ERと一般眼科

眼科ERと一般眼科では、よく診る疾患を中心に診断とマネジメントを学びました。コンタクトレンズ関連の疾患や、ぶどう膜炎、緑内障発作や、白内障などです。また、側視鏡がついた slit lamp では、どのように系統的に診察するかを教わり、それぞれの病変の見方のコツまで習い、アメリカの教育がいかに実践的であるかを実感しました。また、特に多かった疾患が、眼瞼炎とマイボーム腺機能不全です。眼瞼炎はまつげのふけのようなもので、これがひどくなると目の中に入ったりして、掻痒感、異物感、不快感をもたらします。マイボーム腺機能不全は涙液の油成分を作るマイボーム腺がつまってしまうもので、ドライアイの患

者に多く見られます。都会は特に空気が悪いので多いそうで、印象としては半分近くの患者がこれらの診断を受けていました。治療はどちらも warm compress と lid hygiene (具体的にはベビーシャンプーでまぶたを洗う) になり、レジデントの方々がうんざりしながら、毎回この説明をしていたのが印象的でした。ささいな疾患ようですが、実際、患者さんはこの簡単な自宅でできる治療で、かなり快適になったとっており、眼科の不定愁訴(目の不快感、ごごろ、乾くなど)の対応として是非覚えておきたいことだと思いました。20D レンズを使った眼底の診察は日本では単眼で見ますが、アメリカでは頭にヘッドランプのようなものをつけ、双眼で見ます。私は双眼タイプのは使ったことがなかったので、一般眼科で練習をさせてもらいました。これは頭にいちいちかぶるのが煩雑で、患者さんの椅子も歯医者さんの椅子のように倒せるタイプのものが必要なのですが、実際に見せてもらうと立体的にはっきりと見え、さすがに見え方が数段違うなど、感動しました。日本でもすべての診察室にこれを備え付けるべきとは思いますが、大学病院などに1つでも備えてあれば、網膜剥離などが疑われたときに便利だと思います。

●subspecialty

網膜クリニックでは、糖尿病や黄斑変性をたくさん診ました。印象的だったのは、ここでも Evidence Based Medicine (EBM) が実践されている、ということです。網膜クリニックでは ETDRS (Early Treatment Diabetic Retinopathy Study)、DRS (Diabetic Retinopathy Study) に基づいて、明確な理由のもとにレーザー治療が行われていました。また、それに基づいて、必要なときだけ蛍光眼底造影検査が行われていました。角膜クリニックでは角膜移植後や近視矯正手術後の患者さんが多く、日本との違いを感じました。また、手術室で角膜移植の第一人者である Dr. Laibson の角膜移植術も見学することができ、美しい手術に感動しました。アメリカでは医療費が高く保険に入っていない人も多いので、角膜潰瘍の重症例や網膜剥離の手術後でも、入院せず外来だけで治療することも多いです。緑内障クリニックでは、Pigment dispersion glaucoma, angle-recession glaucoma などいろいろな緑内障を見ることができました。眼圧と central corneal thickness との相関がみんなの熱いトピックスとなっており、今後のさらなる研究が待たれます。

●最後に

米国の最大規模の眼科病院にて、眼科の基礎と最先端の治療について学ぶことができたという経験は、生涯ずっと役立つ財産だと思います。このような素晴らしい機会をいただき、Dr. Jaeger、Ms. Bogen、Mr. Kenny、野口医学研究所、横浜市立大学眼科学教室など、ご尽力いただきました皆さまに心よりお礼を申し上げたいと思います。

